

# 事 業 概 要

厚生省報告例

(1) 試験検査実施件数

昭和56年度

検査内訳			件数	検査内訳			件数		
細菌検査	分離・同定	腸内細菌	1,087	飲料水検査	水道水	原水	細菌学的検査	98	
		レンサ球菌	0			浄水	理化学的検査	98	
		ジフテリア菌	-			井戸水	細菌学的検査	436	
		その他の細菌	377				理化学的検査	476	
	血清検査	0	細菌学的検査		1,227				
	化学療法剤に対する耐性検査	0	理化学的検査		1,034				
	動物試験	-	利用水		細菌学的検査	21			
ウイルス・リケッチア検査	分離・同定	ポリオ	-	下水検査	細菌学的検査	26	下係水検査	細菌学的検査	376
		日本脳炎	-		理化学的検査	727		生物学的検査	-
		インフルエンザ	41	清掃検査	し尿	細菌学的検査	-	その他	-
		その他のウイルス・リケッチア	-			理化学的検査	-		
	動物試験	-	生物学的検査			-			
	血清検査	73	その他	-					
	その他のウイルス・リケッチア	4,225	公害関係検査	大気汚染	降下ばいじん	966			
動物試験	-	浮ばいじん			自動測定記録計	-			
培養検査	358	遊ばいじん			その他	128			
結核	化学療法剤に対する耐性検査	0	汚染	い酸化	自動測定記録計	-			
	性病	梅毒		2,244	お物	その他	14		
りん病		0		河川汚濁	その他の有害物質	1,216			
その他	0	理化学的検査	575						
寄生虫・原虫	寄生虫	535	その他		487				
	原虫類	116	その他	993					
	殺虫剤効力・耐性	-	一般室内環境	22					
	その他	-	浴場水・プール水	407					
食中毒	細菌学的検査	433	放射能	その他	28				
	理化学的検査	0		雨水・陸水	-				
臨床検査	血液	血液型	-	食品	-				
		血液一般検査	18	その他	-				
		生化学検査	147	温泉(鉱泉)泉質検査	-				
		先天性代謝異常検査	20,326	家庭用品検査	207				
		その他	40,652	薬品栄養	特殊栄養食品	-			
	尿	10,634	その他		-				
	便	-	その他	-					
病理組織学的検査	-	食品検査	細菌学的検査	1,000					
その他	-		理化学的検査	1,558					
その他	-		その他	0					

## (2) 依頼者別試験検査検体数

昭和56年度

区分	検査項目	検査項目														その他								
		総数	細菌検査	ウイルス検査	リケッチア検査	結核	性病	寄生虫・原虫	食中毒	病理(1)から(9)を除く。生化学検査	食品検査	水質検査	下水関係検査	清掃関係検査	公害関係検査		一般環境	放射能	温泉(鉱泉)泉質検査	家庭用品検査	薬品	栄養		
依頼によるもの	保健所(検査室)	19,597	1,444	3,106	0	358	2,244	651	433	10,799	164	370	0	0	0	28	0	0	0	0	0	0	0	
	保健所以外の行政機関	3,848	0	0	0	0	0	0	0	388	225	0	0	0	2,996	32	0	0	207	0	0	0	0	
	医療施設	62,386	0	1,236	0	0	0	0	0	60,978	0	172	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	学校及び事業所	1,709	0	0	0	0	0	0	0	0	93	1,102	0	0	139	375	0	0	0	0	0	0	0	0
	その他	436	0	0	0	0	0	0	0	0	317	119	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
自ら行うもの		1,110	0	0	0	0	0	0	0	0	301	0	0	787	22	0	0	0	0	0	0	0	0	0

## 事業概況

札幌市は北海道の行政、経済の中心であり、人口147万を擁する大都市に成長した。

人口増加率は他都市に例をみないほど高く、そのうちの2万人は新生児である。この子たちが康やかに育つことは、札幌の未来を託さねばならぬ本市にとって親にも劣らぬ願いである。

そのため、52年度から各種の先天性異常児発見のためのマス・スクリーニングを開始しているが、さらに56年度からは小児がん神経芽細胞腫マス・スクリーニング、57年度からは他に例をみない先天性副腎皮質過形成マス・スクリーニングを開始し、着実に成果を挙げている。

細菌、ウイルス検査の面では、食中毒、食品細菌、集団かぜ、風しん流行などに幅広く対応した。全国規模で開始された感染症サーベイランスにも参加し、電子顕微鏡（TEM、SEM）の導入も決定し、検査体制づくりは進んでいる。

市民生活の環境調査も大きな課題である。水道の普及により水質検査は減少しているが、有害物質を含有している家庭用品の調査、北国特有の冬季における密閉された住居環境の衛生状態の調査など、取り組むべき課題は多く、今年度も積極的に実施した。

食品検査部門では食品衛生法に基づくあらゆる検査を実施しているが、プロピレングリコール、天然着色料の新たな規制により項目数は増加している。国の健康づくり運動に呼応して、栄養学的な面でも検査体制を充実させていきたい。

公害検査関係は公害部と協力体制を組んで調査研究を行っている。大気検査部門では、降下ばいじんの定点調査、重油分析、浮遊粉じん、悪臭物質測定のほか、スパイクタイヤによる道路粉じん対策の調査研究を行った。

水質検査部門では、各種排水の定期監視を実施している。河川水質については生活関連排水に係る調査、生物学的な水質評価の指針としての水生生物調査を行っており、今後は底質調査も行い、総合的な水環境の実態解明に取り組むたい。

## (1) 微生物検査

微生物検査係では、市民からの依頼検査と関係法令（伝染病予防法、食品衛生法他）に基づく行政側からの細菌検査並びにウイルス検査を実施し、微生物学的検策及びこれらに係る調査研究を行っている。

今年度の主な検査項目として、細菌検査では腸管系病原菌、寄生虫卵、結核菌、食中毒菌及び食品細菌などであり、ウイルス検査では集団かぜの流行調査、風しん抗体価測定、トキソプラズマ抗体価測定などであった。

近年における医学の著しい進歩や食生活レベルの向上及び国外への渡航者の増加など、いわゆる社会生活の向上に伴って、従来あまり検査対象とされていなかった感染症原因微生物であるレジオネラ菌、ロタウイルス等、食中毒菌であるカンピロバクター、ビブリオフルビアリス等や、人を介して海外から持ち込まれる性病原因微生物であるヘルペスウイルスⅡ型やクラミディア原虫の一種などの検索が必要になってくると思われる。

このような情勢のなかで、本市としても全国的規模で実施されつつある「感染症サーベイランス事業」を9月から実施し、情報の収集と還元が開始された。当係としても公衆衛生向上のための行政対応として、ルーチンワークの技術的向上に努力しているが、その一環として二カ月余にわたって国立予防衛生研究所村山分室に職員を派遣し、ウイルスの分離同定に関する研修を受けてきた。また効率的かつ迅速な検査法及びそれらに必要な機器、設備等の導入を図るため、凍結乾燥機等のほか、懸案となっていた電子顕微鏡購入のための予算化を行った。

### 業務報告

昭和56年度における微生物検査の実施状況は表1のとおり、検体総数7,878；総項目数13,726であった。以下、主な検査項目について概況を報告する。

#### (1) 細菌検査

##### ア 腸管系病原菌検査

1,087検体の便培養検査（表1）を行ったが、このうち保健所クリニックに伴う検便330（30.4%）、疑似赤痢患者発生に伴う防疫検便407（37.5%）であった（表2）。

なお、病原菌の検出状況としては、保健所クリニックからの検出はなかったが、防疫、その他から赤痢菌及びサルモネラ菌が検出（表2）された。このうち海外旅行者（ほとんどが東南アジア方面）からの検出率は高く、191検体のうち41検体（21.5%）から病原菌（表3）が検出された。

これらの検査と菌型の状況は表3、表4のとおりである。また今年度からカンピロバクターもルーチンワークに組み入れて検査を実施している。

##### イ コレラサーベイランス

このサーベイランスは昭和53年11月から実施している。昭和56年度は、下水処理場の流入水と汚泥について、それぞれ48体の検査を行った結果、コレラ菌（O-1）は検出されず、いわゆるNAGビブリオ菌が流入水で25件（52%）、汚泥で20件（42%）が検出（表5）された。

また、輸入冷凍えび11検体についても検査を行ったが、コレラ菌は検出されなかった（表6）。

#### ウ 結核菌検査

管理検診、住民検診など延べ358検体について喀痰検査を行い、塗沫陽性者4、培養陽性者9を検出した。

#### エ 食品細菌検査

1,000検体の検査を行ったが、このうち行政機関からの依頼は昨年同様少なくなり、その他の行政機関からの依頼が多くなった。

検査材料は惣菜などを含む「その他の食品」が173検体、「魚介類加工品」が134検体、「肉卵類加工品」が127検体など(表7)であった。

検査項目数では、大腸菌群が994、生菌数が717、黄色ブドウ球菌が502などとなった。

#### オ 細菌性食中毒検査

食中毒の疑いとして75件(433検体)の検査(表9,10)を行ったが、札幌市公衆衛生部が食中毒と認定したのは、このうちの7件であった。原因菌としては黄色ブドウ球菌によるもの3件、サルモネラ菌1件、ウエルシュ菌1件、腸炎ビブリオ菌1件、並びにカンピロバクター菌1件であった。なお、カンピロバクター菌の検出は今年度からルーチンワークに組み込んだことによる検出であった。

### (2) ウイルス検査

#### ア 集団かぜの流行調査

昭和56年度の札幌市内の集団かぜの初発は12月9日に小中学校3校であり、その後、学校の冬休みで小休止状態となったが、2月に入り全市的な流行となった。うがい液と咽頭ぬぐい液の48検体について調査した結果、インフルエンザウイルスA(H<sub>3</sub>N<sub>2</sub>)型10株とB型3株が分離された。患者数32,230人で前年度よりも小規模な流行であった。

#### イ 風しん抗体価検査

昭和56年度は市内各保健所及び医療機関からの依頼により、妊婦を含む成人女性を中心に風しん抗体価検査を4,225件行った。

また、昭和56年4月をピークとした風しんの流行があり、これに伴って依頼検体数も増加した。このうち21~30歳における風しん抗体価の陰性率は17.7%(表11)であった。

#### ウ トキソプラズマ抗体価検査

市内各保健所から依頼のあった116件について、ラテックス凝集法で検査を行った。検体は妊婦を含む成人女性であり、この陽性率は9.5%であった。

表1 微生物学的検査実施数

昭和56年度

区 分		検 体 数	総 項 目 数
便	腸 管 系 病 原 菌	1,087	1,988
	寄 生 虫 卵	535	535
結 核 菌		358	716
食 中 毒	便 ・ 吐 物	195	1,076
	食 品	143	1,140
	関 連 材 料	95	416
食 品 衛 生 細 菌		1,000	3,390
ウ イ ル ス	分 離	51	51
	血 清	73	73
	風 疹	4,225	4,225
ト キ ソ プ ラ ズ マ		116	116
下 水	腸 管 系 病 原 菌	96	192
総 数		7,878	13,726

表2 腸管系病原菌検査

昭和56年度

区 分	赤 痢 菌		サルモネラ菌		コレラ菌	
	検 体 数	陽 性 数	検 体 数	陽 性 数	検 体 数	陽 性 数
保健所クリニック	330	0	330	0	0	0
防 疫	407	3	407	34	407	0
そ の 他	254	0	252	2	0	0
自ら行ったもの	96	0	40	39	96	(43) 0
総 数	1,087	3	1,029	73	503	(43) 0

( )はNAGビブリオ菌

表3 海外旅行者の腸管系病原菌検査成績

(月別検出数と血清型)

昭和56年度

月	検体数	陽件数	赤痢菌	サルモネラ (菌種数)	病 大腸	原 菌	コレラ菌	腸 ヒブリオ	ナ プレシオモ	カ バク	同一人からの 複 数 菌 種	備 考
4	19	1		1							サルモネラ+カンピロバクター	1
5	8											
6	6	1		1								
7	12	4		1				2 O-4:K-9 2 O-5:K-?	1			
8	104	24	1 A-III	* 19 (21)	O-1 1 K-51			2 O-4:K-8 2 O-6:K-18	2		サルモネラ+プレシオモナス サルモネラ+サルモネラ	1 2 * 旅行団
9	4	1		1								
10	2											
11	4	1		1								
12												
1	12	5	1 D-1	3					1	1	赤痢+プレシオモナス	1
2	8	1		1				1 O-4:K-63			サルモネラ+腸炎ヒブリオ	1
3	12	2	1 D-1					1 O-4:K-8	1		腸炎ヒブリオ+プレシオモナス	1
	191	41 (21.5)	3 (1.6)	28 (14.7)	1 (0.5)		0	6 (3.1)	5 (2.6)	1 (0.5)		

註 1) 血清型別はデンカ生研製診断用血清を用いた

2) プレシオモナスの菌型は56年度未検査

3) サルモネラ菌型は表4に表わした



表4 ヒト由来サルモネラ菌型

血清型 <sup>1)</sup>	推定菌型	海外 旅行者	一般	医療機関	食中毒	計
B : b : 1,2	<i>S. paratyphi B</i>		1	2		3
: b : 1,2 jor (+)	"		1			1
: eh : 1,2	<i>S. saint-paul</i>	1				1
: i : 1,2	<i>S. typhimurium</i>	1	4	19	1	25
C <sub>1</sub> : g, m, s	<i>S. montevideo</i>	1				1
: m, t	<i>S. oranienberg</i>	1				1
: k : 1,5	<i>S. thompson</i>		3			3
: Lv : en, z15	<i>S. potsudum</i>	1				1
: z <sub>10</sub> : en, z15	<i>S. mbandaka</i>	1				1
C <sub>2</sub> : eh : 1,2	<i>S. newport</i>	2				2
: i : z <sub>6</sub>	<i>S. kentucky</i>	1				1
: Lv : 1,2	<i>S. litchfield</i>				16	16
D <sub>1</sub> : d : vi(+)	<i>S. typhi</i>			1		1
E <sub>1</sub> : eh : 1,6	<i>S. anatum</i>	10				10
: Lv : 1,6	<i>S. london</i>	2	1			3
E <sub>4</sub> : g, s, t	<i>S. senftenberg</i>	6				6
: y : Lw	<i>S. krefeld</i>	2				2
G : f, g		1				1
総	数	30	10	22	17	79

1) デンカ生研(旧東芝)サルモネラ診断用血清を用いた

表5 下水処理場流入水のコレラ菌サーベイランス

昭和56年度

採水場所	流 水		汚 泥 水		計	
	検体数	陽 性	検体数	陽 性	検体数	陽生数
新川下水処理場	12	0 (4)※	12	0 (3)	24	0 (7)
創成川下水処理場	12	0 (8)	12	0 (5)	24	0 (13)
豊平川下水処理場	12	0 (6)	12	0 (4)	24	0 (10)
厚別川下水処理場	12	0 (7)	12	0 (8)	24	0 (15)

※ ( )内は、いわゆるNAGビブリオ菌

表6 魚介類のコレラ菌サーベイランス

昭和56年度

食 品 名	検 体 数	コ レ ラ 菌	腸 炎 ビ ブ リ オ	備 考
冷 凍 エ ビ	11	0 (0)※	0	

※ ( )内は、いわゆるNAGビブリオ菌

表7 食品細菌検査依頼別検体数

昭和56年度

検体種別	依 頼 先	総 数	行 政 機 関		一 般
			保 健 所	そ の 他	
牛 乳 , 加 工 乳		109	2	19	88
魚 介 類		102	18	79	5
冷 凍 食 品		44	8	20	16
魚 介 類 加 工 品		134	—	63	71
肉 卵 類 加 工 品		127	6	51	70
乳 製 品 , 加 工 品		69	7	49	13
ア イ ス ク リ ー ム , 氷 菓		34	—	10	24
穀 類 及 び 加 工 品		61	19	24	18
野 菜 , 果 物 及 び 加 工 品		82	40	—	42
菓 子 類		11	1	1	9
清 涼 飲 料 水		46	20	12	14
氷 雪		8	8	—	—
そ の 他		173	22	68	83
総 数		1,000	151	396	453

表8 食品細菌検査項目別成績

検体種別	一般細菌		食中毒起因菌					その他	総数
	生菌数	大腸菌群	黄色ブドウ球菌	腸炎ビブリオ	ウエルシュ菌	サルモネラ菌	赤痢菌		
牛乳, 加工乳類	109	109	1	1	1	3	3	1	238
魚介類	87	87	76	71	54	47	0	47	958
食品	44	44	16	3	13	16	0	0	136
加工食品	72	134	63	0	4	4	0	3	280
加工食品	65	132	43	1	27	32	0	0	304
加工食品	30	74	30	0	0	0	0	19	179
アイスリーム, 氷菓	20	34	0	0	0	0	0	0	54
穀類及び加工品	57	60	53	1	1	19	3	44	238
野菜, 果物及び加工品	82	82	82	3	3	12	3	63	330
菓子類	7	10	6	0	2	2	0	0	27
飲料	2	46	2	2	2	2	2	2	62
清涼飲料水	8	8	0	0	0	0	0	0	16
その他	134	374	130	6	6	21	6	80	568
総数	717	994	502	88	113	158	17	259	3,390

表9 細菌性食中毒発生状況

発生番号	発生日	摂食者数	患者数	推定原因食	便		吐物		食品		関連材料		推定原因菌
					検体数	陽性	検体数	陽性	検体数	陽性	検体数	陽性	
1	56. 4. 11	674	106	おにぎり	3	3	4	0	22	9	6	0	黄色ブドウ球菌(コアグララーゼ型VII)
2	6. 8	298	112	不明	11	4	-	-	-	-	-	-	カンピロバクタージェジュニ菌
3	15	116	39	生ずし	26	16	-	-	4	1	20	0	サルモネラ菌(S. litchfield)
4	8. 2	197	55	おにぎり	7	3	-	-	-	-	11	3	黄色ブドウ球菌(コアグララーゼ型VII)
5	14	25	8	生ずし	14	6	-	-	11	0	5	0	腸炎ビブリオ菌(O: 3, K: 57)
6	9. 22	15	9	弁当	9	2	2	2	11	6	6	1	黄色ブドウ球菌(コアグララーゼ型VII)
7	10. 30	348	35	弁当(カレー)	10	7	-	-	-	-	10	0	A型ウェルシュ菌(Hobbs型3, 4)

表10 食中毒の疑いによる検査実施状況

昭和56年度

月	検査件数	検 体				検体総合計
		便	吐 物	食 品	関連材料	
56. 4	4	8	4	23	6	41
5	1	0	0	2	0	2
6	15	45	0	12	29	86
7	4	7	0	16	10	33
8	14	27	0	20	23	70
9	6	13	2	14	6	35
10	3	2	0	6	0	8
11	3	12	0	3	10	25
12	2	3	1	7	0	11
57 1	19	63	2	26	10	101
2	3	1	0	3	0	4
3	1	5	0	11	1	17
総 数	75	186	9	143	95	433

表11 風しん抗体価検査年齢別分布

昭和56年度

抗体価 年齢	< 8	8	16	32	64	128	256	≥512	計	陰性率 (%)
0～15歳	29	12	4	3	3	5	5	10	71	40.8
16～20歳	37	12	7	8	35	37	32	23	191	19.4
21～30歳	463	68	252	563	660	387	167	54	2,614	17.7
31歳以上	40	31	72	142	148	62	22	8	525	16.7

## (2) 臨床検査

臨床検査係では、従来から行っている一般臨床検査に加え、昭和52年度からは、新生児先天性代謝異常症等のマス・スクリーニングを実施し、56年度までに札幌市内で出生した新生児 100,892 人の検査を行った。その結果、先天性代謝異常症16人、先天性甲状腺機能低下症15人、先天性甲状腺ホルモン結合たん白欠損症10人を発見し成果を上げている。

さらに本年度からは、生後6～12カ月の乳幼児を対象に、尿ろ紙による小児がん神経芽細胞腫マス・スクリーニングを実施するとともに、57年度からは全国に先がけて新生児を対象に血液ろ紙使用の酵素免疫測定法による先天性副腎皮質過形成マス・スクリーニングを開始し、母子保健のより充実のために試験検査、研究を行っている。

56年度の主な業務内容は下記のとおりである。

### 業務報告

#### (1) 先天性代謝異常マス・スクリーニング(表1)

札幌市内で出生した全新生児を対象に20,326件の検査を行った。届け出出生数からみた受検率は101.8%で、市内出生数以上の受検率であった。検査内容はフェニルケトン尿症、ガラクトース血症、ヒスチジン血症、ホモシスチン尿症、メイプルシロップ尿症の5種目で、スクリーニングの結果13例の精密検査を北大、札幌医大のコンサルタントに依頼し、そのうち1例がヒスチジン血症と診断され、早期治療を行っている。

#### (2) 先天性甲状腺機能低下症(クレチン症)マス・スクリーニング(表1)

先天性代謝異常マス・スクリーニングと同様に、市内で出生した全新生児を対象に放射性免疫測定法により検査を行った。本年度の検査件数は20,326件で、精密検査の結果5例がクレチン症と診断された。53年6月に事業を開始して以来、57年3月までに81,633件の検査を行い、15件の患児を発見した。発生頻度は1/5,442である。

#### (3) 先天性甲状腺ホルモン結合たん白欠損症(TBG欠損症)マス・スクリーニング(表1)

55年5月から開始したクレチン症と同様に、市内で出生した全新生児を対象に血液ろ紙から検査を行った。本年度は20,326件の検査を行い、精密検査の結果1件がTBG欠損症と診断され、早期治療を行っている。発生頻度は1/2,032である。

#### (4) 小児がん神経芽細胞腫検査(表2)

本年度から事業を開始し、札幌市内に居住している生後6～12カ月の乳幼児を対象に、尿ろ紙を用い薄層板によるVMA定性、HVA定量一次検査を行い、疑わしいものについては高速液体クロマトグラフィーによる二次検査を行い判定を行った。検査は10,634件を行い、精密検査2件を実施したが、患児ではなかった。

#### (5) 一般臨床検査(表3)

一般臨床検査は、4,760件の検査を行った。検査の内訳は、結婚・妊娠による性病予防法によるものと、健康診断受診者の梅毒検査がほとんどであった。

本年度の健康者にみられる梅毒陽性数及び陽性率は表4のとおりで、前年度より若干減少した。

臨床検査の概要

表1 先天性代謝異常等検査状況

昭和56年度

区 分		件 数	再検査数	精密検査 依頼件数	患 者 数
血 液 ろ 紙	フェニールケトン尿症	20,326	1	0	0
	ガラクトース血症	20,326	59	9	0
	ヒスチジン血症	20,326	10	1	1
	ホモシスチン尿症	20,326	58	3	0
	メイプルシロップ尿症	20,326	7	0	0
	クレチン症	20,326	153	18	5
	T B G 欠損症	20,326	58	2	1
総 数		142,282	346	33	7

表2 神経芽細胞腫スクリーニング検査状況

昭和56年度

区 分	件 数	再検査数	精密検査 依頼件数	患 者 数
神経芽細胞腫検査（尿ろ紙）	10,634	66	2	0

表3 一般臨床検査状況

昭和56年度

区 分		件 数
血 清	ガ ラ ス 板 法	2,244
	梅 毒 血 球 凝 集 反 応 ( T P H A )	2,244
	精 密 検 査 ( 凝 集 法 ・ 緒 方 法 )	17
	H B s 抗 原 検 査	95
	H B s 抗 体 検 査	41
	一 般 生 化 学 検 査	11
血 液	血 液 一 般 検 査	108
総 数		4,760

表4 健康者にみられた梅毒反応陽性並びに陽性率

昭和56年度

検査対象	区 分	検 体 数	陽 性	
			件 数	%
一 般 検 査		1,953	15	0.77 (1.03)
妊 婦		273	1	0.37 (0.86)

( ) の数は前年度

### (3) 環境検査

環境検査係では、水道法に基づく飲料水検査のほか、プール水、浴場水等の一般環境検査及び有害物質を含有する家庭用品の規制に関する法律に基づく家庭用品検査など、市民の生活環境に関する調査・研究等を行っている。

本年度、環境検査業務で実施した検体数は表 1 のとおり、水質検査 1,988 検体、一般環境検査 457 検体、家庭用品検査 217 検体であった。

飲料水の検査依頼は、上水道の普及に伴って年々減少の傾向にあるが、プール水は施設数の増加により、前年度から依頼検体数が急増している。

今後、本年度から開始した一般家庭の住居衛生調査の分野をさらに拡大して、水、衣、住の広い領域にわたる市民の生活環境向上に努めていきたい。

#### 業務報告

##### (1) 水質検査

昭和56年度の水質基準適否状況は表 2 のとおりである。

即ち、一般検査の検体数と適合率は 1,793 検体の 66.1% であり、その内訳は水道水が 494 検体、73.9%、井戸水が 1,279 検体、63.6% である。

特に、本年度は、8月に発生した台風等の影響により、2度にわたる未曾有の大水害に見舞われ、行政からの依頼で井戸水 288 検体の細菌検査を実施したが、その適合率は 43.7% であった。

これら水質検査により、水質基準に適合しない検体の項目別内訳は表 3 のとおり、井戸水では、それが大腸菌群、色度、一般細菌及び鉄の順で、細菌関連に不適が多かったのは水害の影響の現われであり、また、水道水では、色度、鉄、臭気の順であった。この傾向は、表 4 に示す一般市民から寄せられた苦情内容にも現われている。

##### (2) 一般環境検査

プール水及び浴場水検査を 407 検体、行政依頼によるコインランドリー施設の細菌検査を 28 検体行った。さらに、本年度は一般住居の室内環境について、温熱、汚染条件 10 項目の実態調査 (22 検体) を実施した。

##### (3) 家庭用品検査

有害物質を含有する家庭用品検査は表 5 のとおり 217 検体、263 件について実施したが、すべて基準に適合した。